

## (2) 土師質皿形土器について

A～I 地点において全体の器形がつかめるもの（口径・底径・器高が測定できるもの）は73点に及ぶ。その内大半（70点）はF地点とG地点から出土したものであるため、両地点のものを中心に小論を進めたい。

両地点の土師質皿形土器（搬入によると思われるものを除く）の共通点としては、内面及び外面体部にロクロによる横ナデ整形が行われ、底部に糸切りを施し、それ以外の整形痕がほとんど見られない点があげられる。しかし両地点のものは同じ梅翁曲輪内でありながら胎土の含有粒子の割合（G地点のものは雲母を多量に含み赤色粒子・白色粒子は微量であるが、F地点のものは、G地点のものに比べ雲母は少なく、赤色粒子・白色粒子は多めである）、色調などに異なった傾向を持ち、また法量的にもF地点にはI類が存在しない点など差が見られる。

a類はII B類を中心としているが、他の類にも広く及び、数的には半分弱をしめている。またG地点のII Ba類は、II Bb類に比べ黒変部分をもつものが少ない傾向があるようである。

県内における土師質土器の発生は11世紀後半とされており、以来近世に至るまで生産し続けられてきたものであるが、まとまった資料を提供している遺跡は現在のところ非常に少ないといえる。そんな中で、本県における土師質土器の編年の研究は、以前から行われており、末木健氏と坂本美夫氏によって案が出されている。編年の根拠としては館などの存続期間や伴出する陶器類などがあげられているが、それ以前の条件として各遺跡ごとの土器の形態的な規格性が強いことに基づいていると思われる。(伝)岩崎氏館跡からは多量の土師質皿形土器が出土しており、器形から見ると確かにばらつきはあるが、(伝)岩崎氏館跡を代表する形態があり、編年に用いられている。しかしF地点及びG地点出土の土師質皿形土器は、胎土については地点ごとに類似しているものの、形態については当然全体的な傾向はあるわけであるが、代表する器形を選ぶには難がありな規格性に乏しい観を受ける。

土師質土器は地域性がきわめて強い土器といわれ、本県においても編年的な研究がますます進むことが望まれる。また形態的な流れをおうと同時に、同時期においても異時期においても類似する土器はその地域どうし、あるいは館どうしを有機的に結びつける資料となりうることを考えていきたい。生産、流通も含め今後の課題といえる。

- (註1) 坂本美夫他 「シンポジウム奈良・平安時代土器の様相（第Ⅱ版）」『神奈川考古』14
- (註2) 末木健 「平安時代以降の土師質土器の編年について—山梨県北巨摩郡明野村出土土器を中心として—」『信濃』第28巻9号 1977
- (註3) 坂本美夫 「山梨県に於ける15世紀以降の土師質土器編年—境川村寺尾出土品を中心に—」『甲斐考古』20の1 1983
- (註4) 山崎金夫他 『(伝)岩崎氏館跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会 1977
- (註5) (註3)に同じ